

中国仏教流れ

(1)伝来受容期（後漢～東晋）

①後漢の明帝感夢求法説——これは明帝が夢の中で金色に輝く「金人」を見て西方に仏がいることを知り、大月氏国（アフガニスタン北部）に使者を派遣して『四十二章経』を写させ、さらに仏寺を建てた（迦葉摩騰と竺法蘭を住ませた）とするものである。この仏寺は洛陽の白馬寺であると言い伝えられてきたが、現在では、この説は史実とはみられていない。

②明帝の異母弟であった楚王英 『誦黄老之言，尚浮屠之仁祠』 仏＝浮屠（浮図）

中国の皇帝ではじめて仏教を信奉したのは後漢の桓帝（在位一四六～一六七年）であるが、桓帝も楚王英と同様、仏陀と黄老とを合わせて祀り、不老長生の現世利益を願った。このように中国人は仏教を現世利益の神の一つとして受け取ったのである。

(2)研究普及期（東晋～六朝末）

漢唐訓詁學→老莊思想＋易経＝玄学（老莊思想を以て儒教經典を解釈する学問で、魏晋南北朝時代に仏教とともに盛んをみた。玄学において、道＝無。

仏教は最初道教の延長バージョンとみなしたので、般若経においての空＝無と解釈された。

格義仏教とはインドより中国へ伝来したサンスクリットで書かれた仏教の經典を、中国古来の固有の思想、とりわけ老莊思想の用語を用いて解釈しようとした態度のこと。

格義仏教において、空＝無、菩提＝道、涅槃＝無為と説明された。（竺法雅は仏図澄の弟子であり、仏教を道教の延長として解釈する代表人物）

道安（仏図澄の弟子でもあり、原典重視）は初期の時代には中国古典、とくに『老子』の言葉を媒介にして仏典を理解したが（『安般守意経』序）、後には仏典は仏典として正しく理解すべきだとして、格義を排斥した。しかし、老莊学をもって仏教を理解する方法は広く当時の社会に流行したのであった。（＊道教なしで仏教の普及は難しい）

格義仏教の終わりに大きな影響を与えたのは、鳩摩羅什→仏教經典翻訳→仏教は格義の方法に頼らず、そのまま直接的に理解されるようになった。

道安の弟子である慧遠の沙門不敬王者論は時の権力者である桓玄に対して述べた論である。

（沙門＝仏教徒）。神不滅論。〔中国の六朝時代（220～589）に靈魂（神）の不滅をめぐる展開された論争に対する慧遠の論文。中国に仏教が移入されて輪廻（りんね）応報思想が知られるようになると、輪廻応報を信ずる仏教信奉者は神不滅を唱え、輪廻応報を認めない仏教反対派の人々は神滅を説いて、両者の間で神滅神不滅の論争が行われた。神の不滅とは、人間は死ぬと、肉体（形）は滅びるが、靈魂（神）は不滅で、次の新しい身体に宿って次の生を営むことをいう。この不滅の神が存在するからこそ、人間は過去、現在、未来の三世にわたって天上、人間、（修羅）、畜生、餓鬼、地獄の六道（一説に五道）の間を輪廻し、己の行いに対して相応の報いが己に及ぶという。〕

僧肇——悉有仏性説を説く

道生——悉有仏性説に基づいて頓悟成仏説を説く（二人とも鳩摩羅什の弟子）

＊悉有仏性説は涅槃経の説く内容である。涅槃経は道生が生きていた頃に伝わってきた。

＊インド仏教と中国仏教の違い――**闡提**（**仏性を持っていない人**）が存在するかどうかの違い、インド仏教は存在する一方中国仏教は存在しないとみなしてる。

頓悟成仏説は莊子の万物斉同という中国従来思想に基づく。

頓悟成仏説の反対には漸悟成仏説がある。

大頓悟師（**道生**など）―― 一気に悟る

小頓悟師（**道安**、**僧肇**など）――悟りは段階性がある。1～7は漸悟、7を超えると一気に10まで上がる。

仏教最初は仏道と呼ばれた。宋齊梁陳以後仏教と呼ばれた。

(3)諸宗成立期（隋唐）

隋

三論宗――仏教の宗派名。中観派の論書である『**中論**』『**十二門論**』『**百論**』の3論を所依として立宗したのでこの名がある。**吉蔵**は三論宗を説き、中道思想を主張する。非有非無。

智顗は天台宗の実質的な開祖である。天台宗は『**法華経**』を最重要經典として採用した。

五品位とは道理智慧を得ることで五品の功德を成す。

唐

華嚴宗――**華嚴経**を究極の經典とする。初代**杜順**、三代目**法蔵**。

法相宗――インド瑜伽行派の思想を継承する。唯識法相宗は、万有は阿頼耶識（アラヤシキ）より縁起したものであるとしている。それは主として迷いの世界についていうが、悟りの諸法も阿頼耶識によって成立すると説くので、後世、阿頼耶識の本質は、清らかな真識であるか、汚れた妄識であるかという論争が生じた。

律宗――唐の**道宣**によって成立。

密宗――**金剛智**と弟子の**不空**が『**金剛頂経**』系密教を紹介することで、インドの代表的な純密經典が初めて伝えられた。こうして、天台教学をはじめとした中国人による仏教思想が大成した時代背景において、それ以前の現世利益的密教とは異なった、成仏を意図したインド中期密教が本格的にもたらされ、その基礎の上に中国の密教が確立し受容されるに至った。仏教を護国思想と結びつけた不空は唐の王室の帰依を得、さまざまな力を得たことで、中国密教の最盛期をもたらすことになった。その後、密教は武宗が大規模に行った「会昌の廃仏」の打撃を被り、円仁らが中国に留学した頃はまだそれなりに盛んであったと考えられるものの、唐朝の衰退とともに教勢も弱まっていった。

【＊廃仏――三武一宗の法難{**北魏の太武帝**、**北周の武帝**、**唐の武宗**}】

(4)禅と浄土（宋～清）

教宗（禅宗以外の宗）――（經典有り）

禅宗――**經典なし**。**不立文字**は禅宗の**スローガン**であり、經典を作らないがのちは参考書みたいな形式で作った書物はいくつある。宗門第一書と言われている『**碧巖録**』。直指人心、以心伝心。見性成仏（ここの性は仏性）

＊碧巖録は一人の禅僧の書物ではなく、雪ちょう重顕（980～1052）禅師が「景德伝灯録」などに収録されている約1700人の語録の中から100種類を選び出した。その後、**圓悟克勤** {（えんごくくごん）1063～1135年} が出て、これに「乗示」というまえおきと、「著語」という短評、更に「評唱」という説明と批判を添えて纏め、これを「碧巖録」と名づけた。ではなぜ碧巖としたかであるが、円悟が執筆をした靈泉院の書斎の額に碧巖と書かれていたからである。またなぜ額に碧巖と書かれてあったかは次の通りである。

靈泉院は夾山善会（かつさんぜんね）禪師が開山した。ある日、一人の僧が訪ねて彼に質問した。「いかなるか、これ夾山の境」と問答をけしかけた（つまりお前さんの境地は如何ほどか）。これに対して、彼は答えた。

猿は子を抱いて青嶂の後ろに帰り

鳥は花をふくんで碧巖の前に落つ　と答えた。つまり、碧巖石は禪である。

梁の菩提達摩は禪宗の初祖。

唐六祖慧能は六代目。

馬祖道一は唐代の禪僧である。馬祖禪とも呼ばれるその禪思想では、禪宗で初めて經典や觀心によらずに日常生活の中に悟りがある大機大用の禪を説き、「平常心是道」、「即心即仏」など一言で悟りを表す数多くの名言を残している。

五家七宗——臨済宗、沩仰（いぎょう）宗、曹洞宗、雲門宗、法眼宗を五家と呼び、臨済宗から分れた楊岐（ようぎ）派と黄竜派を付加して七宗と呼んでいる。

＊浄土教——東晋、廬山の慧遠（334—416）は『般舟三昧經』によって十方現在仏の一としての阿弥陀仏を想念する（心に阿弥陀仏を信じ、西方浄土に往生して悟りを得る）白蓮社という念仏団体をつくり、結社念仏をたてた。それは、後の中国の称名念仏とは異なるが、浄土教の始祖とされ、日本の浄土宗でも僧侶の法名に蓮社号を用いる。中国仏教でとくに強調された末法思想は、現実の不安定な世相に失望し、希望を後世に託そうとする浄土教信仰の発展に大きな影響を与えた。のちには禅浄融合の念仏が中国仏教の主流となった。經典としては「無量寿經」「阿弥陀經」「觀無量寿經」がある。

根本經典

狭義の「經」「經典」 - 「スートラ」（元々はバラモン教において『ヴェーダ』のためにまとめられた散文綱要書を指してこう呼んでいたが、後にバラモン教・ヒンドゥー教の様々な文献や仏教の文献にも、この呼称が採用されていった。）三蔵の一。釈迦の直接の教説

広義の「經」「經典」 - 「仏典」全般。「大蔵經」「一切經」

＊中国で出来た經もあるが、インドのものは格が違う。

釈迦の原始教団→部派仏教（のち大乘仏教）、上座部、大衆部

般若經——般若波羅蜜を説く大乘仏教經典の總称。

智慧＝空の道理で悟る智慧のこと。万物は因果により存在している。

十二因縁（縁起）「無明」から始まり「老死」までの十二の出来事。

＊一番小さい般若心經の色即是空、空即是色などの言葉が有名

＊大般若經が一番長い　600巻がある

華嚴經——三界唯心を説いてる。三界『欲界（六天がある）、色界（十八天がある）、無色界（四天がある）7/7のレジュメ参照』のすべては心から変現したものであって、心を離れては存在しないということ。だからこれらの世界は心が作り出したという。

ex.十地品——悟りに至る十段階、元は十地經というものだった。

法華經——一乗思想、これは仏教の種々の教説はいずれも存在意義があり、それぞれ釈尊が人々を導くために方便として説いたもので、実は唯一の真実の教えがあるのみであるとする思想。『法華經』に非常に顕著に現れ、釈尊の説いたことを聞いたうえでの実践（声聞乗）、単独で

悟りを開く実践 (縁覚乗あるいは独覚乗) , 自他ともに悟ろうとする実践 (菩薩乗) のすべてが一つに帰すると考える。

涅槃経——如来常住、一切衆生悉有仏性、常樂我淨、一闡提成仏を説く。衆生とは心を持つ全ての存在。もともとは植物は除く。近代の大乗仏教において衆生つまり人間以外の山川草木や動物などすべてにおいて仏性があるという解釈から「一切悉有仏性」とも言われるようになった。

維摩経——維摩詰というインドの在家僧が空を説く

浄土三部経

阿含経——釈迦が直接説いたとされるもの。原始仏教の頃成立。中国では当時あんまり重視されなかった。

教相判釈

たくさんの経典が入ってくるが、句論中には矛盾するものも現れてた。しかし全て仏の説いたことだろうと考え、どう整合性を持ち解釈するか→説いた順番も考え、教えの重要性を序列化する。つまり仏教のもつ経典を、その形式、思想内容などによって分類しこれを体系化して、仏陀の真の教えを確立する試みのこと。

ex.南斉の劉虬が説いた「五時七階」

三七日まで説いたのは人天教、それが提謂波利経となる

十二年まで説いたのは三乗別教、それが阿含経

三十年まで説いたのは大乘空教、それが般若経、維摩経

四十年まで説いたのは常任教、それが涅槃経 *涅槃経が一番偉い

ex.天台宗は「法華経が一番偉い」→天台智顗は五時八教の教判を唱えた。

華嚴時→華嚴経 (悟ってすぐ)

鹿苑時→阿含経 (悟ってから初めて鹿に説いた時)

方等時→維摩経 (方等は大きい意、大きな教えを説き始めた時)

般若時→般若経

法華涅槃時→法華経、涅槃経

八教は化法の四教と化儀の四教

化法の四教とは、釈尊一代五十年の説法を、天台大師が教理内容の面から蔵教・通教・別教・円教の四つに分類したものです。

化儀の四教とは、釈尊一代五十年にわたる説法の形式・方法を、天台大師が頓教・漸教・秘密教・不定教の四つに分類したものです。

ex.法相宗の三時教

有教→阿含経

空教→般若経

中道教→華嚴経、解深密経

三教関係史

(1)対立抗争史

①老子化胡論争 (道教VS仏教) 西晋～

背景：仏教伝来以来、伝統文化の道を守る者は仏教をインド、乃蛮夷の教えと思われ、野蛮な文化であり、中国にはないので、適当ではない。二は華夷地域によって、益の証老子序を持って東を木、所属陽、西は金、所属陰。陽は陰より優れているので、道教の方が優れている。三は華夷の間の種族の違い、夷人始信仏教なので、仏教は劣っている。4は、仏教伝来の時には中土が衰え始めることを、仏教のせいにする。

過程：西晋の道士である王浮は僧の帛遠と論争する時に道教を高しするために、『老子化胡経』を作った。仏教側は対抗するために、『清浄法行経』を作って、三聖派遣説を説く。

＊『老子化胡経』――すなわち、西方の関所をこえて姿をかくしたと伝えられる老子は、実は胡地におもむいて性質のひねくれた胡人を教化するために仏教をはじめたのだといい、したがって仏陀は老子の変化身にほかならないと説かれる。

＊『清浄法行経』――老子・孔子・顔回はそれぞれ摩訶迦葉、光浄菩薩、月明儒童の権現だったとするもの。

②神滅神不滅論争（儒教VS仏教）東晋～梁

背景：慧遠のところを参照。

過程：代表的な神不滅論は廬山の慧遠(334—416)の『沙門不敬王者論』の形尽神不滅篇→何承天は『達性論』を著し反対した。

南斉～梁の時に范缜(はんしん)(450?—510?)の『神滅論』が有名である。神即形、形即神。

南斉の武帝時代、蕭子良と蕭琛は『難神滅論』を書いた。＊難は非難する。

沈約は『難范缜神滅論』を著した。

この論争は六朝時代を通じて行われ、論理的な收拾がつかなかったが、梁の武帝(464—549)が神不滅論に加担するに及んで、不滅論に軍配があがった。

③夷夏論争（道教VS仏教）南斉

背景：中国本来の思想である儒教や道教と外来(夷狄)の思想である仏教との間で、その優劣を争った論争が盛んになっていた。

過程：南朝宋の顧歡が著わした『夷夏論』 ＊仏教不要論はインドの風俗が野蛮で、劣っているとみなす。

鎮之即(ちんし)は『與顧道士析夷夏論』を書き反論した。道同俗違(風俗は違っても、道は一緒だよ)その他、朱昭之は『難夷夏論』、朱広之は『疑夷夏論』、慧通は『駁夷夏論』を著し反論した。『清浄法行経』から、孔子は仏の弟子であるので、だから仏教が上、道教が下。

さらに、インド中心説も出現した。

僧敏(そうみん)は『戎華論折顧道士夷夏論』 ＊戎は中国、華はインドのちの『南齊書』は仏教の方が素晴らしいと書いていた。

④韓愈の排仏論（儒教VS仏教）唐代

背景：韓愈は道教と仏教が中国文明から道徳という基盤を奪い去ったことに痛感していた。僧侶の代表から仏舍利を公的な形で宮殿に迎え入れようとする憲宗皇帝の計画があった

過程：この計画に反対した韓愈は『論仏骨表』という上表文を書いて、仏教攻撃した。

彼には「原道」を唱え、儒教の「仁義」の「道」は孟子以後衰えてしまっているが、道教や仏教の「道」よりも中国にふさわしいと論じた。これは彼には仏教や道教が道教的に十分でなく、中国の社会や政治に思想的な基礎づけを与え得ないという信念があった。

⑤老子批判（儒教VS道教）東晋

背景：東晋当時の道教崇拜が盛んになって、儒教が衰えている。

過程：孫盛は『老子非大賢論』と『老子疑問反訊』を著して、『老子』の矛盾を批判した。

1. 有為無為、有欲無欲
2. 礼楽
3. 和光同塵（すぐれた才能を隠して、俗世間に交わること）

この三点を主に批判していた。

(3)三教相互融合&影響

＊ 対立しながらも、相手に負けないように向こうの優れた所を吸収し、発展する。

①牟子理惑論

とは仏教疑問解答書

五経などの儒教、道教の経典を引用して、仏教に対する疑問を解説する→仏道儒の求める道は同じだという主張を論証する。（五経だけでは足りない、仏典も老子も素晴らしいものなので加えるべきだという主張も見られる）。

牟子理惑論は当時の仏教と道儒の間の論争を反映した。夷夏論争と神滅神不滅論争。さらに当時の人々の仏教に対する認識を理解することができるので、価値のある書物である。

②大乘思想と靈宝経（仏教→道教）

古靈宝経（後漢？～東晋——別名『靈宝五符経』という符呪を中心とする比較的古い《靈宝経》を基に、5世紀の陸修静が整理したものが現在の《靈宝経》の源流をなし、本来10部36巻からなるとされた。陸修静以後は、大乘仏教教理の強い影響下に、衆生済度を主に説く《度人経》をはじめとする新しい《靈宝経》が多数作られた。元始天尊を最高格の神として、大規模な死者を救済する→死んだ人の靈魂まで仙界に行ける。

欲&色&無色を説きの『大蔵経』に習って『道蔵』とよぶ道教の一切経典を編集した。

＊道蔵は全体を洞真部（上清経）、洞玄部（靈宝経）、洞神部（三皇経）の三洞と、太玄部、太平部、太清部、正一部の四輔との七部に大別し、さらに三洞それぞれのなかを本文、神符、玉訣、靈図、譜録、戒律、威儀、方法、衆術、記伝、讃頌、表奏の12類に細分する。この三洞四輔の分類は、呪術的な基盤のうえに徐々に道家哲学や仏教教理などを加えて歴史的に形成されてきた道教教理を、洞真部は元始天尊所説の大乘、聖人の教え、洞玄部は太上道君所説の中乗、真人の教え、洞神部は太上老君所説の小乗、仙人の教えとし、これに四輔を補助的に配して共時的に体系化しようとした初唐の道教教理学の教相判釈に基づくもので、あくまでも歴史的限定性をもった分類範型であった。

③道教的世界像の形成←仏教が与えた影響

道教的な世界像は三界三十六天説（主流）、（二十八天説もあり）

＊欲界（六天）、色界（十八天）、无色界（四天）。三界共二十八重天。四梵天（四天）、三清天（三天）、大羅天。

それは仏教の三界二十八天に影響されていた。

＊道教の洞天とは地上の仙山（仙人が住む山）。十大洞天と三十六小洞天がある。

道教の地図とは真ん中に崑崙山（天柱）がある A.十洲三島、B.道教系四大陸、C.仏教系四大陸。

Aだけ

A+B

A+C この3つの考え方がある。

その一方、仏教の地図にも須弥山がある。＊7/7のレジューメの図を参照

④仏性説と道性説

前半は仏教→道教

涅槃經—— 一切衆生、悉有仏性

唐の海空經—— 一切衆生、悉有道性

本際經（作者劉進喜）、当時の大乗仏教の影響を受けて、道教は無心論を説来始めた。劉は曰：百姓者、衆人之総称也。然聖人無心、有感斯応、応随物感、故以百姓為心、既無心応、亦無不応。＊この無心は『莊子』にもともとあった言葉である。『莊子・天地』曰：無心得而鬼神服。『莊子・知北遊』曰：無心而不可與謀。無心論も又魏晉玄学の重要課題である。

本際經が説く道性説は自然は因位の道性ではなく、自然は道性の同一である。このことは仏性説と一番違っている。なお、因位とは仏教用語で、まだ修行中で、成仏していない菩薩などのような地位のこと。

後半は道教→仏教

唐の潘師正の言葉—— 一切有形、皆含道性。

唐代中期になると、湛然（天台中興の祖）は草木成仏説を説く。

↓同じ

無情有性説。 ＊無情は非生物。性は仏性

⑤偽經（疑經）

四〇六部（一〇七四卷）

開元釈教録

四天王經

使者

提謂經

長生符、不死藥、太山地獄、泰山

⑥五——天下大数

五丘

五臓

五常

五戒→仏教

そして道教の老子五厨經から影響を受けて、仏説三厨經ができた。

＊老子五厨經は延寿經、益算經（算は寿命の計算）、不死經。

⑦道教仏教が宋学に与えた影響

朱子学とは世界は理と気でできた物と考えている。

しかし、儒教にはもともと『理』という概念がなかった、仏教から来たものである。宋学の形而上学的性格は仏教に由来する。さらに朱子学が修養方法として提唱した「静坐」は坐禅そのものである。

仏教の華嚴經の世界には理と事がある

＊「事」は世界に存在する物事のこと。「理」は事と事の結びつきなど裏側に働く原理のようなもの。

四法界説――理法界、事法界、理事無碍法界、事事無碍法界。

道教は気一元論を説いてた。（道）と気がある。

道教の神仙術の金丹術は不老不死の薬である丹を錬製するための術であり、その複雑な操作手順が、儒教の經典である「易經」の陰陽理論に基づいて書かれている。しかし「易經」の「易に太極あり、太極より両儀生じ、両儀から四象生じ、四象から八卦が生じる」という記述が、「周易参同契」では丹薬製造に際しての実際的手順として解釈される。周濂溪の「太極図」は、このような道家の錬金術の具体的プロセスを抽象的形而上学的に解釈しなおしたものである。

さらに朱子学は道家的汎神論、造化の汎神論とでもいうべきものを取り込んでいる、なぜならそれが儒教の「共生」説とつながっているからである。

(4)三教帰一

「**三教帰一**」というのは、仏教、儒教、道教が、一つに帰するという考え方です。